

かなかつたが、自分は決してこれに満足してゐるのではなく、他日自分に課せられたる義務を遂行する決意を持つてゐると述べてゐる事である。これを思ひ浮へるとこの序論も彼の世界史への一過程として考へられ一更興味を感じる次第である。

次にこの世界史の據つてゐる立場を考へて見るに、"die Geschichte der Menschheit von ihren dunkeln Anfängen bis zur Gegenwart als eine Einheit zu fassen" (Vorwort) とあり、副題 171 "Der Werdegang der Menschheit in Geisteskraft und Staat, Wirklichkeit und Geistesleben" とある。かくの如き人類の歴史を統一的に把握せんとする事は、ゲッツの主張である

Gesamtschichte des Menschengeschlecht によつたためと思はれる。それ故内容について見ても地方、國家等を別々に取扱はず、多くは總括的な標題の下に發展の同一性に重きを置いてゐる觀がある。ことに近世以降の取扱ひに於ては従來のものが各國史に分裂してしまひ勝ちなを改め、總括的な敘述方針を採用してゐる事は注意を引く。又これと共に政治事項より文化事項に力を入れてゐるのも一つの特色であらう。而してかゝる點は十九世紀以降の取扱ひに於て最も顯著である。

體裁を見ると敘述の他に多くの圖版、挿圖、簡單なる史料の複製等を入れてゐる。これ等の中には D. J. Stein などもとして作られたためか同じものも多いが、新しく加へられたものも相當ある。D. J. Stein 同様この點で重寶なわけである。なほ各巻の卷

末には年表をつけてゐるが、Cambridge History に於ける様なビブリオグラフィのないのが物足らぬ感じを起させる。

以上は本世界史に關する一般的特色の二三を擧げたのみである。なほ各項目の出來については熟讀玩味の上によづらねばならぬ。今はたゞこの新しき世界史の出現を歡び傳へるに止める。(Propylien Verlag, Berlin, 1929—31) (廳見)

● Ernst Kornemann:

Niebuhr und der Aufbau der altrömischen Geschichte.

本論はモムゼン、マイヤー等の歿後、古代ローマ史學界の最高峯に立てるコルネマンが、一九三一年十月六日より十日迄、ボン大學に於て開催さるべかりし第十八回ドイツ歴史學大會—或事情の爲流會となる—に發表せんとせし講演草稿の上梓されしものである。一九三一年を彼のニーブルの死後滿百年に當る、ボン大學そはニーブルの研究奮闘の最後の場所である、コルネマンに於ては、此年、此所に、歴史に就いて論ぜんとする時、想念自らニーブルに馳り、併せて爾後のローマ史研究の發展を省みる情切なるものがあつたであらう。

本論はもとよりコルネマンの冷靜にして透徹せる理性と、古代ローマ史に對する豊富なる蘊蓄とによる、ニーブル以來百年間の古代ローマ史研究の反省と批判とを主とせるものであ

る。即ち、強き Wirklichkeitssinn を伴ふ批判と総合とによつて歴史的事實の綜合的考察の方法を確立し、從來古典言語學のみによつて、美化され孤立せしめられて居た古代の歴史を救出せるはニプールの學的貢獻の最大なるものといふべきも、此卓越せる方法を適應して成立したる彼のローマ史は尙不完全なりとの讒を甘受しなければならぬ。何故か、一此處にニプールの資料たる Tradition が、その多くの點に於てその著作者の虚構になるものであり、或點は希臘文學の影響によつて捏造されしものなることである。かくて今日、國民の傳承談話の中に多くの歴史的事實の包含を過度に信じたニプールの Volkstheorie は完全に破壊されたのである。古代ローマ史研究はかくてニプールの後で出てニプールの離れニプールの於て

忽ち許にされた史料批判へと進んだ、即問題は、現在我々の手にする古代ローマ史に關する傳承は、何時、誰によつて、如何なる動機より初めて作られしものであるかへと轉じた。モムゼン、及その後繼者マイヤー等は何ら適確なる證據を示さず、單に直覺的に、それがサムナイト戦争時代(紀元前四世紀)に僞侶によつて作られしものとするも、それは、古代ローマの傳承の中に平民の名前、平民の物語の包含されたるを説明し得ず、故に、作者が僞侶なるは疑なきも、それ等の傳承構成は紀元前

三百年 vor Ostia によつて平民も亦僞侶團に参加するに至つて後のことであるとする Albert Ehmant 一派の説をとるべきである。隨てローマ人の眞の geschichtliche Epoche は紀元前四世紀でなくして三世紀に始る。而して一方此時代より希臘文化の影響著しく、特に希臘の建國文學 Kates Hieronim の刺戟は、新に平民意識を加味せし僞侶團をして、ガリヤ人の侵入掠奪から逸れし一部の告示表 tribuae deatbaae の上に、希臘的要素と平民意識とを加味して、ローマ史を再建せしめたのである。

ローマ史は、文獻的には、不完全ながらコンスル表を示す麻布卷子本 *Tabulae Fastorum* 及びカルタエとの第一回通商條約十二銅版等の二三の根本資料によつてとにかく紀元前四五一年迄遡り得るのみである、一總じてかくの如き文獻批判は、ニプールのより分離しニプールの缺陷を補ふべく出て來たりしも、本來目的とする所は傳承の中より眞に存在せし事實の抽出であつた、此點に於ては再びニプールの復歸して居るのである。もしそれ紀元前四百五十一年前に遡らんとせんか、それは今發展途上にある碑文學、考古學、エトルスキ研究等の大成に俟つべきのみ。かくの如くニプールの以後百年のローマ史研究の發展を壓縮するを主眼とせるコルネマンは、筆を起すや先づ人間ニプールの追憶せずにはおられなかつた。脆弱な肉體と豐な天稟、生國テムマルク、養成の地プロイセン、憧憬の地英國、それ等の何れにも向けた強い愛着、幼年時代を育んだ Süddeutsch の Altdorf

の狭地より受けた困窮的生 *Plot. mangeln* と全歐を旅して知識豐
な父より受けし思辨的生 *Plot. beaptrais*、歴史研究と政治活動—
此れ等の不調和な生活の中にあつて、而もあらゆる方面に交互
に全力を傾倒せしニーブール、而して結局過度の努力の爲に五
十四歳の働き盛りに物故しなければならなかつたニーブール
を、賞讃と驚嘆と一種の同情とを含む筆致で描いて居る。

我々は此小論に於てコルネマンの先輩追慕のゆかしい心と、
ローマ史に對する深い理解とに接し自ら明朗な快感の湧出する
を禁じ得ないのである。

(Historische Zeitschrift, Bd. 145, Heft 2, Leipzig, 1931.) (井上)

●西洋史研究 東北帝國大學西洋史研究會

近時公私各大學にして史學研究の報告雜誌を發行せざるもの
殆んど無之有様であるが、今年六月新たに東北帝國大學西洋史
研究會より西洋史研究の發刊を見るに及んで史學研究の益々隆
盛なるを思はずものあり實に欣快に堪へぬ次第である。本誌は
主として、東北帝國大學に於ける西洋史研究者の發表機關であ
る。それが國史、東洋史の研究者諸氏より獨立して純西洋史研究
の發表機關たる所に、同會々員諸氏の熱烈な研究心、燃ゆる如
き意氣を察知すべく、同時に、中村・大類兩先生の、同會員諸
氏の發展を祈らるゝ篤い情をも窺ひ得る。飽く迄も冷靜な而も
強烈な理性と、篤い師弟の情の渾然と融合し凝固したものが此
西洋史研究であらう。第二輯もやがて此款には上梓されると言

ふ、かくて恐らく、本誌は年二回位の發刊となるのであらう。
第一輯の内容について批評は紹介者の望む所ではなく唯本誌の發
刊を祝し、今後の發展を祈る次第であつて、今は第一輯の内容
目次を列擧するにとゞめる。

發刊に際して

アルクハルトの『伊太利ルネサンスの文化』を讀みて

大類 仲

Thesens 傳説考

原 隨 園

キケロの政治思想

今村 文 英

ギボン「ローマ帝國衰亡史」に關する二三の問題

酒井 三 郎

中世及びルネッサンス研究に於ける Jacob Burck-

hardt 素描

イタリヤとロシアのルネッサンス文化 (I. Rusino)

長 崎 茂 次

羅馬領獨逸の經濟的發展 (H. Aubin)

金 倉 英 一

二十世紀初頭に於ける英獨 (R. B. Alward)

松 原 直 雄

高 橋 數 雄

十九世紀の歴史哲學及び歴史の神學 (J. Wach)

山 口 榮 吉

メイネッケの價值的歴史觀 (F. Meinecke)

野 村 廣 吉

●羅馬文化史

小林 秀雄著

本書の基礎が著者も序言で言はれる如く H. Niese, Grundriss der römischen Geschichte nebst Quellenkunde であり、且その H. Hohl の改訂になる第五版であらうことは原書と對照して明である。而して、本書が、尙「モムセン、ベリー（ベリーの事か）」等を參酌された上に出来上つたものと言はれても、先づ大部分はニーゼの書の翻譯に近いものである。隨て翻譯又はそれに近き本書の文章上の批判を、言語學者に委ねるとせば歴史的批判はニーゼ及ホルその人等に向けられなければならないであらう。ニーゼの書はもとく Iran Müller 監輯の Handbuch der klassischen Altertumsforschung 叢書の第三卷第五部として、主としてローマの政治的發展を敘述するを目的とし、政治以外の土俗、宗教、文學等の諸文化に就いては夫々該叢書の他の部門に委ねられたのである。隨てニーゼの書は文化史といはんより政治史である。もし本著者がローマ文化史を敘述せんとしてその典據をニーゼの書に求めたりとせば大なる誤ではなかつたらうか。勿論ローマ人の獨創的文化はそれは法律である、ローマの眞に獨創になる文化―此の限りに於いて、ローマ文化と云ひ得るものは法律に他ならない。故に、此の限られたる意味に於て、ローマ文化史は必然的にローマ政治史なる形態をとらざるを得ぬ、といふ正しい理解の上に本書はなれるものであらうか。著者は序文に於て「元來ローマはギリシヤの如き

藝術の國に非ずして、法律の國であるから」ニーゼの書が多少無味乾燥と感ぜられる如き書となつたといふ意味のことを云はれる。こゝに、ローマ文化及びニーゼの書の成立動機に對する著者の理解の深さが窺はれる。とまれ紀元四七六年西ローマ帝國の滅亡迄のローマの政治的發展を概説し、ローマ史に關心を有する者にはよき入門書として現はれた本書がニーゼと共に政治史に偏したるは本書の特質なるも、同時にそれが、ローマ文化史としては缺くる所多きを思ふのである。（菊判四九六頁、白東社發行、定價五圓）〔井上〕

●田中萃一郎史學論文集

慶應義塾大學教授法學博士田中萃一郎氏逝いて此に十週年、その遺著の一部が表題の如き書名の下に三田史學會から發行された。

名著「東邦近世史」「ドーンン蒙古史」や折々東洋學報などに物される論文によつて、著者を純粹な支那學者とのみ思つてゐた我々は卷頭の著作目録によつて故人が西洋史學にも深き造詣を持ち古くは希臘の古代より最近の歐米政界の狀況を論じ、更に史學理論にも一家の見識を具へらるゝを知つて今更乍ら驚き入つた次第である。一般に明治時代に學問された先輩は間口も奥行も廣く深く、今日の様に何處の何時期專攻といふ細かい繩張のなかつたのは我々後輩の敬服にたへぬ所である。

本書收むる所二十五篇、東西古今に互つてとりどりに有益な文字であるが、中で一二に就て紹介するならば、「支那學の沿革」